

2000年有珠山噴火における洞爺湖温泉街の復興  
～これからの課題について～

卒業論文

2007年12月19日

同志社大学文学部社会学科社会学専攻

学籍番号 12042002 番 遠藤元

指導教官 立木 茂雄

## 要約

2000年3月31日に北海道の有珠山が噴火した。それから7年の歳月が経とうとしている。

有珠山の噴火は今回が初めてではない。有史以来の有珠山は1663年（寛文3年）の噴火から今回の2000年（平成12年）噴火まで、実に8回の噴火を記録している。その歴史の中でも2000年の噴火は人的被害が0人だったことからその避難指令は評価されたものであった。

この2000年噴火の被害は、伊達市、虻田町、壮瞥町及び洞爺村の4市町村にわたる住宅、道路、下水道などで直接的な被害の総額は約233億円に達した（国道130号、高速道路を除く）。このようにライフラインや建物といった物的被害は寛大であったが、それと同様に観光界にも大きな打撃を与えた。予約の入っていた宿泊客はキャンセルが相次ぎ、安全性を懸念する観光客が多く、観光客数は大幅に減少した。

こうした被害を受けて北海道や近隣の市町村は、防災まちづくりを始めとしたいくつかの復興対策を計画しそれに取り組んでいった。その中でも、地域全体を「博物館」と見立て、その中の自然、農場・山林・漁場や集落、遺跡などを展示とみなし、住民参加型で作り上げる新しいタイプの野外博物館である「エコミュージアム構想」というものに対して地域が一体となって取り組んできた。これ以外にも、もっと洞爺湖温泉街の魅力を高めようとする「魅力ある観光地づくり整備事業」という事業にも取り組んだ。これは主に温泉街の観光施設の人々が協力して魅力をアピールしていくものである。

こうした復興活動の成果もあり、観光客数は1993年のピークとまではいかずとも順調な回復を見せた。しかし、ここ数年は観光客数がいまいち伸び悩んでいる。その原因として、海外からの観光客数が大きく影響していると考えられる。近年日本では、国内旅行より海外旅行への注目が高まっている。そうしたことから国内からの観光客数が伸び悩んでいるのだと考えられる。ところが海外、主にアジアや東南アジアでは日本への注目度や人気が高まっており、日本へ観光に来る外国人は増加している。そういった中で、洞爺湖町に訪れる外国人はそれに対して増加率が上がっていないのが現状である。

このことから、洞爺湖温泉街をより発展させるためにはもっと海外への誘致活動などに力を入れていかなければならないと考えられる。また、これだけではなく、更に地域住民と協力して地域全体で活気ある魅力的な街づくりをしていく必要があると考えられる。

第一章	はじめに…	P.1
第二章	洞爺湖温泉と過去の噴火の歴史…	P.2
第一節	洞爺湖温泉の歴史…	P.2
第二節	有珠山の噴火史…	P.2
I.	寛文3年(1663年)噴火…	P.3
II.	明和5年(1769年)噴火…	P.3
III.	文政5年(1822年)の噴火…	P.3
IV.	嘉永6年(1853年)の噴火…	P.4
V.	明治43年(1910年)の噴火…	P.4
VI.	昭和18～20年の(1943～1945年)噴火…	P.4
VII.	昭和52年(1977年)の噴火…	P.5
第三章	被害状況の概要…	P.5
第四章	復興対策…	P.7
第一節	復興対策への取り組みの経緯…	P.7
第二節	有珠山周辺防災街づくり計画…	P.8
第一項	火山資源活用による観光開発等…	P.9
第二項	新たな観光地の整備等…	P.13
第三節	エコミュージアム構想…	P.15
第一項	エコミュージアムとは…	P.15
第二項	有珠山周辺におけるエコミュージアム…	P.15
第三項	エコミュージアムの推進体制…	P.15
第四項	洞爺湖周辺地域のエコミュージアム構想…	P.16
第四節	魅力ある観光地づくりの整備事業…	P.18
第五章	復興対策の結果…	P.21
第一節	復興事業とその進行状況…	P.21
第一項	エコミュージアム構想の進行状況…	P.21
第二項	魅力ある観光地づくり整備事業の進行状況…	P.23
第二節	観光客入り込み数の変化…	P.25
第三節	これらから見てくること…	P.29
第六章	考察・課題…	P.29

## 第一章 はじめに

2000年3月31日、北海道の有珠山が噴火してから7年が経とうとしている。この噴火は日本であった噴火の中でも記憶に新しい噴火であると思う。この噴火に際しては、避難者数が虻田町、壮瞥町、伊達市をはじめとし、16000人をも数えた。これは周辺住民の3分の1にもあたる数字である。火山学者の的確な助言と行政の迅速な対応により、幸い一人の人的被害も出さずに済んだ。しかし、その他の被害は近郊の市町村に大きな影響を与えた。住家被害は、全半壊・一部破損を合わせて850棟にも上り、道央自動車道・国道等の被害を除いた被害総額は230億円を超えるものであった（虻田町編集委員 2002）。

施設や建物の被害だけではなく、観光業界に大きな被害を与えた。その中でも特にそういった被害が大きかったのは洞爺湖温泉街であった。洞爺湖は、北海道屈指の観光地でもあり、その湖南一帯に広がる洞爺湖温泉は、平成5年（1993年）には年間453万人が訪れる温泉街であった。しかし、この噴火の影響によって観光客は一時期130万人まで落ち込んでしまった。こうしたように、施設の被害に関わらず、被災後長期にわたる経営不振や閉鎖に伴う損失が大きかった（月刊観光編集部 2005）。

しかし、噴火後の様々な復興を経て洞爺湖温泉は、噴火から数年で観光客は順調に回復し、平成15年には年間340万人もの人々が洞爺湖を訪れるようになった。そして、来年2008年には洞爺湖町で主要国首脳会議（サミット）が開催されることが決定している。

このように目に見える形では、洞爺湖町は噴火から数年で観光客を回復させ、サミットが開催されるくらいまでに順調に回復し活気が戻ったかのように感じるが、果たして実際はどうなのであろうか。目には見えない問題や課題等があるのではないか。

そこで本稿では、有珠山周辺地域のここまでの復興過程を観光客入り込み数などの統計を用いて分析し、実際に自分の足で歩いて温泉街を見て感じたことから、現時点でサミットが開催されるまでに回復した要因を探るとともに、これからの洞爺湖温泉街の課題やそれに対する対策を考えていきたいと思う。

## 第二章 洞爺湖温泉と過去の噴火の歴史

### 第一節 洞爺湖温泉の歴史

洞爺湖温泉は明治 43 年、有珠山の寄生火山である四十三山の噴火活動により誕生した温泉とされている。火山国・温泉国といわれる日本でも、その誕生の時期や生成の原因と課程が明らかな温泉は極めて稀である。

洞爺湖温泉の始まりは、明治 43 年の噴火の 6 年後に温泉を発見したことが大きく関係している。

大正 6 年（1917 年）6 月に、壮瞥町の通郵便局長でアマチュア火山研究家の三松正夫氏らが、虻田鉱山発掘状況見学の帰途、湖畔に湯が出ているという噂を聞き、湖岸の砂や岩を掘り起こしてみたところ、熱い湯が湧出した。翌日、再び現場に赴き温度計で 43 度の温泉を確認したという。

三松氏ら三人は、道庁に温泉の利用と堤防の使用を出願し許可を受け、温泉宿をつくり「竜湖館」と称して経営を始めた。これが洞爺湖温泉街における旅館のはじまりである。大正 6 年秋のことである。そうして、洞爺湖に可能性を見出した観光事業が進出し、温泉旅館が作られていった。洞爺湖温泉が温泉街として栄え始めたのはその後、昭和 24 年に支笏洞爺国立公園に指定され、昭和 30 年代に入り、宿泊施設の大型化が一気に進んでいってからである。当時は虻田から鉄道が敷設されており、ゴルフ場が開設されるなど戦後のかなり早い時期から観光地としての発展が進んでいたが、特に高度経済成長期開始以降は旅行体系の変化も含めて急速な発展を示していった。このように洞爺湖温泉は、北海道屈指の観光地といっても、他の温泉地と比べれば比較的その歴史は浅い。そして観光事業者の多くは町外からの進出である（虻田町編集委員 2002）。

### 第二節 有珠山の噴火史

有史以来の有珠山は 1663 年（寛文 3 年）の噴火から 2000 年（平成 12 年）噴火まで、実に 8 回の噴火を記録している。古文書に記録された最初の噴火は 1611 年（慶長 16 年）であるが、この記録はこれを疑問とする研究者があり、現在では一般に有珠山の噴火記録としては認知されていない。

1979 年（昭和 54 年）に刊行された壮瞥町史には「有珠山噴火史年代録」として 1977 年

(昭和 52 年) 噴火まで 14 回の噴火年代を記述してあるが、火山地層との対比、文献の裏づけなどから現在の研究者の定説は 2000 年噴火で 8 回目である。よって本稿では、1663 年の噴火以降、1977 年まで定説となっている 7 回の噴火について記述する。

尚、この節で記述する内容で特に記述がない場合は「虻田町編集委員 2002:638,19」を参考としたものである。

### I. 寛文 3 年 (1663 年) 噴火

7000 年とも言われる長い眠りに期間を経て有珠山が活動を再開したのは、1663 年 (寛文 3 年) のことであった。有珠山の第 2 活動期のはじまりである。この年、旧暦 7 月 11 日から地震が発生、鳴動が続き 14 日未明、山頂から噴火した。噴火は 3 日間続いたが、15 日には地震・噴火ともに激しく、降灰や噴出物は 6 億 5 千トンにも達した。

### II. 明和 5 年 (1769 年) 噴火

1663 年 (寛文 3 年) の噴火から 106 年を経た 1768 (明和 5 年) 旧暦 12 月、有珠山は山頂から噴火した。

明和噴火を記録したものから、「火砕流の先端の火砕サージの被害」と推定されているが、堆積物調査によると火砕流の本体は上長和地区までは到達していない。そして、火砕サージは洞爺湖中央の中島にまで到達したとも言われている。また、死傷者の記述がないのは当時これらに地域には住民がほとんどいなかったからだと考えられている。なお、この噴火の噴出物は、1663 (寛文 3 年) 噴火ほど大量ではなかったと言われている。

### III. 文政 5 年 (1822 年) の噴火

1822 年 (文政 5 年) の噴火は 1663 年 (寛文 3 年) に次ぐ激しい噴火であった。82 名の犠牲者を出し、コタンを壊滅させたこの噴火は、有珠善光寺の創建、幕府直営牧場開設後のことであり、記録も多く残されている。

この時犠牲となった人々や牧場の数は、死者 82 人、牧場 2,468 頭中 1,430 頭焼死となっている。また、この噴火の火砕流は 1991 年の雲仙普賢岳 (死者 43 人) にも劣らぬものであった。そして、火砕サージに熱風は海上まで押出したものと言われている。文政熱雲と言われたこの火砕流噴出後、有珠山の活動は旧暦 2 月 9 日 (新暦 3 月 31 日) まで続いたが、その後鎮静化した。

#### IV. 嘉永 6 年（1853 年）の噴火

1822 年（文政 5 年）から 31 年ぶりに有珠山はまた活動を始めた。火口原の中に大有珠といわれた溶岩ドームを形成した活動である。

1853 年（嘉永 6 年）の旧暦 3 月 5 日から地震、鳴動が続き、それが次第に激しくなり旧暦 3 月 15 日有珠外輪山北東部から噴火、附近に火山灰・砂礫を降らせた。この時の噴火で有珠山は再び火砕流を噴出した。嘉永噴火の活動は約 5 ヶ月続き、大有珠が隆起し山頂が裂けて立岩ができたといわれている。

火砕流は南西の風に乗って北東の方面に流れた。この火砕流にともなった堆積物の性質は、文政噴火の火砕流堆積物と区別がつかなかったほどよく似ている。堆積物は、現在の洞爺湖温泉や壮瞥温泉方面に分布している。当時はこの地域は人家がほとんどなかったために犠牲者の出た記録はない。

#### V. 明治 43 年（1910 年）の噴火

1910 年（明治 43 年）7 月、有珠山はまたまた活動を再開した。嘉永噴火から 57 年後のことであった。有史以来 5 度目の明治 43 年噴火には、以下のような特徴がある。

- (1) 有史以来、はじめての山麓噴火であった。
- (2) 潜在ドーム、明治新山（四十三山）を生成した。
- (3) 噴火後、温泉が湧出した。
- (4) 5 つの火口から熱泥流が流出して耕作地を埋めた。暑さは当時、部分的に 2m～2.5m に達したといわれるが、現在は 1m を越えるところは稀である。
- (5) 世界で初めて火山性地震をとらえた（日本の火山学のはじまり）。
- (6) 噴火 2 日前、室蘭警察署長が住民に強制力をもって避難命令を発した（事前避難の成功）。

この時、的確な判断によって死傷者を出すことなく避難が行われたが、温泉発見の目的で非常線を突破して禁止区域に立ち入り、熱泥流に飲み込まれた死者が出た。この明治の噴火は開拓途中の周辺住民に大きな被害を与えたが、6 年後には温泉の発見という恩恵をもたらした。この時発見された温泉が現在の虻田町の発展につながっているのである。

#### VI. 昭和 18～20 年の（1943～1945 年）噴火

1943年（昭和18年）12月、有珠山は33年ぶりに活動をはじめた。太平洋戦争のさなか、日本の敗戦が濃厚になってきた時である。それから1945年（昭和20年）9月までの1年9ヶ月、「第1期 詮噴火期」、「第2期 爆発活動期」、「第3期 溶岩円頂丘形成期」という3期を経て、地震・噴火・大地の隆起を繰り返して、溶岩ドームを生成した。

この時の噴火によってできた溶岩円頂丘が、昭和32年6月に「昭和新山」と命名された。これが昭和新山のはじまりである。なお、この時から洞爺湖温泉側の「四十三山」も「昭和新山」命名を機に「明治新山」と呼ばれ、住民に親しまれるようになった。

## Ⅶ. 昭和52年（1977年）の噴火

昭和新山を生成した1943年（昭和18年）暮れの火山活動開始から、34年目の1977年（昭和52年）8月6日早朝から地震を頻発し、わずか32時間後に有珠山は山頂から噴火した。

この時の有珠山の活動は、洞爺湖温泉街に大きな打撃を与えた。この噴火は、1977年（昭和52年）8月7日から同年8月14日までの軽石噴火を第1期、同年11月16日から翌昭和53年10月まで続いた水蒸気爆発、マグマ水蒸気爆発を第2期と分けることができる。

火山活動が沈静化に向かった1978年（昭和53年）10月24日夜、泥流が洞爺湖温泉街を襲った。それまでにも小規模な泥流の発生はあったが、この夜の雨はバケツをひっくり返したような局地的な豪雨であった。有珠山麓に堆積した火山灰や土砂が、土石流となって木の実の沢団地を直撃し、母子2人が犠牲者となった。また、温泉街中心部も泥流に襲われ、小学校二年生の男子児童が洞爺湖方面に押し流されて行方不明となり、計3名が犠牲となった。複数の犠牲者は、1822年の文政噴火以来であった。

## 第三章 被害状況の概要

2000年の噴火においては、2000年3月28日未明、室蘭地方気象台が火山観測情報第一号を発表し、有珠山の火山性地震の増加に注意を呼びかけた。その後極めて短時間のうちに、翌29日の3時には避難警告、6時30分には避難指示が出されている。そして、火山学者などの助言を行政の対応に生かし、噴火前に地域住民の避難を完了することができたため、一人の人的被害を出さずに済んだ虻田町編集委員（2002）。



しかし、ライフラインなどの物的被害は寛大であった。まず、洞爺湖温泉と虻田本町を結ぶ、国道 230 号、町道泉公園線が、直下からの噴火により当該ルートでの復旧が不可能となり、新ルートでの整備を行うこととなった。また、同様に、洞爺湖温泉と虻田町本町を結ぶ下水道トンネルについても、新たな整備が必要となった（虻田町編集委員 2002）。

生活関連施設では、病院、小学校、町営住宅 5 棟 124 戸をはじめとする多くの住家が、泥流や噴石などの被害により、現在での復旧を断念せざるを得なくなった。さらに、噴火活動による火山堆積物などにより、洞爺湖温泉市街地で 400 世帯が居住する地区約 20ha が、土砂災害防止のための砂防施設の対象地区となり、洞爺湖温泉地区の市街地は大きく縮小されることとなった（虻田町編集委員 2002）。

伊達市、虻田町、壮瞥町及び洞爺村の 4 市町村にわたる住宅、道路、下水道などで直接的な被害の総額は約 233 億円に達した（国道 130 号、高速道路を除く）。表 1 は被害状況を、表 2 は市町村別被害額を示したものである。

洞爺湖温泉地区や壮瞥温泉地区においては、3 月 29 日の洞爺湖温泉地区の宿泊予約数は 1,494 件であったが、このうち 870 件が宿泊客からキャンセルがあり、残りは温泉側から連絡を取って取り消しとした（奥田 2003）。

今回の噴火が 1977 年（昭和 52 年）の噴火と違う点は、前回の噴火では各ホテルに保安要員の残留があったのに対して、今回は極めて短時間のうちに全員が避難をしたということである。今回は、噴火のあった 31 日には北海道電力によって電力が全面的に遮断され、無人になったホテル等の食材を貯蔵していた冷蔵庫への電力供給が途絶えたために、数百万円の侵害を受けたホテルもあった。この後、各観光ホテルはほぼ 4 ヶ月の休業を余儀なくされ、洞爺湖温泉観光協会の事務局も 31 日に洞爺村へ避難し、後に伊達に臨時事務局を移転させることとなった（奥田 2003）。

また、前回の噴火での堆積物が軽石などの粗い粒子であったのに対し、今回は極めて細かな粒子であって重機を利用することが大変困難であり、ほぼ手作業に頼らざるを得なかった。この細かな灰は水を含むとセメント状に固まり、ホテルの屋上に積もったものを土嚢に積めて搬出するという作業に非常に手間を要した（奥田 2003）。

このように、観光客が前年に比べて大きく落ち込み、観光業をはじめとする地域経済に大きな影響を与えた。また、農業や水産業の一次産業においても、噴石や地殻変動による農地や施設等への被害のほか、避難の長期化による生産減少などの影響を受けた。さらに、国道 230 号、道央自動車道といった幹線道路や鉄道などの交通網の寸断により、有珠山周

辺ばかりではなく北海道経済全体にも大きな影響が及んだ。

表 1 被害状況

被害項目(平成14年3月31日現在・最終) 23,296,919千円		被害額(億円)
	被害項目	
住宅被害	全壊119棟 半壊355棟 一部破損376棟 計850棟	19.4
非住宅被害	全壊12棟 半壊11棟 計 23棟	16.0
土木被害	道路、橋梁、河川、砂防設備、漁港 計64ヶ所(道・市町村分)	45.5
農業被害	農地・農業用施設、農作物・家畜、営農施設 計89戸、33件	2.7
水産被害	共同利用施設1件	0.1
林業被害	林地36.06ha 治山施設8ヶ所	6.9
衛生被害	水道1件 病院・一般廃棄物処理施設4件	55.3
下水道	44ヶ所	40.1
文教施設	小学校3件 中学校2件 高校1件 給食センター1件	10.2
社教被害	8件	13.7
福祉被害	公立3件 法人立3件	1.6
都市被害	公園2件	0.2
堆積土砂排除	1件(市街地)	0.6
商工被害	商業65件 工業11件 その他68件	20.6

表 2 市町村別被害額 (単位：千円)

市町村名	被害額
伊達市	540,815
虻田町	20,704,960
壮瞥町	1,971,144
洞爺村	80,000

## 第四章 復興対策

### 第一節 復興対策への取り組みの経緯

2000年有珠山噴火は、噴火前での非難が成功し、人的被害は免れたものの、市街地や幹線道路の被害、長期にわたる住民の避難生活、地域経済への打撃など、地域に与えた影響は非常に大きいものであった。

また、有珠山は、今後21世紀においても、20年から30年という周期で噴火が起これと言われており、有珠山周辺地域においては、今回の噴火災害から一日も早く立ち直るよう対策を講じるとともに、将来の噴火に備えた災害に強い街づくりに取り組む必要があった。

被災地の復興には、国、道、地元市町相互の密接な連携や協力はもとより、それぞれの

機関においても、復旧・復興に向けて推進体制の強化が望まれた。

避難以降、4月14日を手始めに度重なる理事会を開催して各方面への要望事項のとりまとめなど、さまざまな活動を続けていった。本来3月末まで決算を行い、総会を経て中小企業協同組合法に基づく道への報告を行うことになっていたが、関連資料等を運び出す暇もなく急遽避難したため、道の了承を経て時期をずらし、7月21日に平成12年度総会を開催した。

このようにして、復興対策へと取り組んでいった。策定された復興対策は次のとおりである。

北海道が策定する復興計画基本方針の基礎となるものであり、伊達市、虻田町、壮瞥町が策定する復興方針の方向性を示すものである「2000年有珠山噴火災害復興方針（平成12年12月策定）」の前の復興方針に基づき、伊達市、虻田町、壮瞥町の1市2町が共通の認識のもと、目標に向かって進めるため、1市2町が策定する復興計画の基本となる「2000年有珠山噴火災害復興計画基本方針（平成13年3月策定）」の災害に強い、安全で安心して暮らせる活力に満ちたまちづくりを進めるために伊達市が策定した「2000年有珠山噴火災害伊達市防災まちづくり計画（平成13年7月策定）」の観光のメインである虻田町が、将来の噴火に備え、観光産業などといった地域の基幹産業の振興との調和を図り、国、道、近隣市町村との連携を深めながら災害に強いまちづくりに取り組むための「2000年有珠山噴火災害虻田町復興計画（平成13年7月策定）」の今までの防災まちづくり施策に加え、今回の噴火災害で顕在化した諸問題を解決するために、第3次壮瞥町まちづくり総合計画と連動させ、将来の噴火災害に備えた火山と共生するまちづくりを行うための「平成12（2000）年有珠山噴火壮瞥町復興計画（平成13年7月策定）」である。

これから、平成14年6月に策定された「有珠山周辺防災まちづくり計画」の第2章「防災街づくり計画（実施計画）」について、その中でも、火山資源活用による観光開発と新たな観光地の整備等についてとエコミュージアム構想について触れていく。また、「魅力ある観光地づくり整備事業」にも触れていく。

## 第二節 有珠山周辺防災まちづくり計画

この計画は、これまで北海道が復興の方向性と施策の概要を示した「復興計画方針」（H13.3）、およびこの基本方針を踏まえて1市2町が策定した「復興計画（基本方針）」（H13.7）と「復興計画（実施計画）」（H13.12）を掲載し、復興の主要施策である有珠山周辺の土地

利用とエコミュージアム構想に関する資料を加えたものである。

尚、この節で記述する内容で特に記述がない場合は「北海道 2002」を参考としたものである。

#### 第一項 火山資源活用による観光開発等

洞爺湖周辺の観光の競争力を維持・向上させていくためには、エコミュージアム構想を推進しながら、新たに創出された火山景観や温泉等の火山資源を活用した観光開発を進める必要がある。そのためには、エコミュージアムの中核施設等の整備を行うとともに、点在する関連資源とのネットワーク化を図りながら、観光客が快適に周遊できる受入体制の整備等を地域が一体となって進める必要がある。

○火山観光施設等の整備を行う。

- ・温泉の調査・開発
- ・温泉供給施設の整備
- ・中核施設の整備
- ・遊歩道の整備
- ・駐車場の整備
- ・災害遺構の保存
- ・案内板の設置 など

○新たに創出された火山景観の保護とその適正な利用を図る。

- ・国立公園計画の変更
- ・国立公園としての利用上必要な施設整備

○観光客の受け入れ体制の整備を行う。

- ・観光ガイドブックの作成・配布
- ・観光ボランティアガイドの養成 など

○観光客ニーズを把握し新たな観光商品の開発を進める。

- ・広域的な観光ルートの整備・検討
- ・地域の食材を活用した観光商品づくり など

○観光客誘致のためのPR活動を行う。

- ・映画等のロケーションの誘致
- ・修学旅行の誘致促進

- ・海外への観光客誘致活動への展開 など
- 観光客誘致のための各種イベントを実施する。
  - ・復興ロングラン花火大会の開催
  - ・洞爺湖水まつりの開催
  - ・復興祈念イベント（昭和新山火まつり）の開催
  - ・昭和新山国際雪合戦の開催 など
- 各種大会・会議等を誘致する。
  - ・火山学会等の誘致 など
- 火山資源等の活用について検討する。
  - ・火山灰や噴石等の土産品への利用検討

実施計画

表 3 伊達市

	事業名	事業主体	事業の概要	実施年度
1	北海道観光誘致特別対策 事業費(道全体)	北海道	有珠山噴火の影響により落ち込んでいる観光客の誘致 促進を図るため、有珠地区及び道内各観光地の魅力アッ プと宣伝誘致事業を行う事業に対する負担金	第一期(H13)
2	だて噴火湾縄文フェスタ	伊達市	第四回全国縄文シティサミットと同時に各種イベント を開催し、噴火災害からの復興の姿を全国にアピール し、縄文を生かした体験学習など修学旅行を誘致。また、 有珠モシリ遺跡の国史跡指定に向けた運動への足がか り	第一期(H13)
3	有珠山治山の森整備事業	伊達市	治山の森から外輪山までの散策路が整備され壮瞥・洞爺 湖温泉への通過可能となり、新たな観光スポットとなる ように有珠登山道の玄関口である治山の森の駐車場拡 張など周辺の整備	第二期(H16 ～18)

表 4 虻田町

	事業名	事業主体	事業の概要	実施年度
4	自然散策路整備事業	虻田町	散策路整備(水道、駐車場、トイレ、看板、手洗い場)	H13～14
5	有珠山火山活動災害復興支援土地条件等調査 (温泉資源変動調査)	北海道	火山活動に伴う温泉資源の変動状況を明らかにし、今後の資源動向の予測と資源の安定確保及び適正管理を提言する	H13～14
6	有珠山洞爺湖観光ガイド事業	有珠山ガイドボランティアの会	観光ガイドの育成、ガイド資料の作成、ガイド参加者の費用	H13～15
7	道央三温泉広域観光PR事業	道央三温泉協議会	ポスター、観光マップ、CD-ROM 作成	H13
8	洞爺湖温泉歓迎塔及び観光案内板設置事業	虻田町	歓迎塔の建設、観光案内板の設置	H15～17
9	体験学習要請事業	虻田町	体験学習工作機械の購入、指導員の養成、体験学習PR資料の作成	H14～16
10	道産子サッポロビール会参加事業	虻田町	東京にて特産品の紹介、観光PR、郷土芸能の紹介	H13
11	観光振興事業	洞爺湖温泉観光協会	ロングラン花火大会、有珠山復興イベント事業、旅客誘致宣伝事業、湖畔美化清掃等	H13～
12	北海道観光誘致特別対策事業費(道全体)	北海道	有珠山噴火の影響により落ち込んでいる観光客の誘致促進を図るため、有珠地区及び道内観光地の魅力アップと宣伝誘致を行う事業に対する負担金	H13
13	湖上とうろう祭 in Lake Toya の開催	とうろうを復活する会	とうろう祭り開催	H13
14	洞爺湖温泉街シャッターアート	にぎわい空間創出計画推進プロジェクト委員会	商店街各店舗のシャッターをペインティング	H13

表 5 壮瞥町

	事業名	事業主体	事業の概要	実施年度
15	中核施設整備の検討	壮瞥町	中核施設整備	第2期
16	旧国鉄胆振線鉄道橋脚跡整備	壮瞥町	周辺整備	第1期
17	新山沼周辺整備	壮瞥町 北海道	周辺整備	第2期
18	昭和新山観測点の整備	壮瞥町	周辺整備	第2期
19	地殻変動跡整備	壮瞥町	周辺整備	第1期
20	サイクリングロード整備	壮瞥町	伊達市上長和から新山周辺 L=3500m W=3.0m	第1期～第2期
21	有珠山・昭和新山周辺散策路整備	壮瞥町	有珠山周辺散策路整備	第1期～第2期
22	国道453号整備	国	歩道の設置	第2期～第3期
23	昭和新山地区観光地の再生	観光協会	基本構想の策定	第1期
24	修学旅行誘致等復興キャンペーン事業	観光協会	修学旅行誘致復興キャンペーン補助金	第1期
25	復興祈念イベント(昭和新山火祭り)	観光協会	昭和新山火祭りなど 復興祈念イベントの開催	第1期
26	北海道観光誘致特別対策事業費(道全体)	北海道	有珠山噴火の影響により落ち込んでいる観光客の誘致促進を図るため、有珠地区及び道内各観光地の魅力アップと宣伝誘致を行う事業に対する負担金	第1期
27	有珠山火山活動災害復興支援 土地条件等調査(温泉資源変動調査)	北海道	火山活動に伴う温泉資源の変動状況を明らかにし、今後の資源動向の予測と資源の安定確保及び適正管理を提言する	第1期

## 第二項 新たな観光地の整備等

体験、安らぎ志向など多様化する観光客ニーズの変化に的確に対応するためには、地域の観光事業者が個々に取り組むだけでなく、農林水産業や製造業との連携を図りながら、国や道、市町村、関係団体、企業、住民が一体となって、地域の自然、歴史・文化、温泉などの地域資源を生かした新たな魅力ある観光地づくりを進める必要がある。

また、観光資源に加えて、新たな観光基盤の整備による利便性の向上を図りながら、周辺地域との広域的な観光ルートの形成などを進める必要がある。

○新たな魅力ある観光地づくりを進める。

- ・伊達市有珠地区
- ・虻田町月浦地区
- ・虻田町泉北地区
- ・壮瞥町仲当や地区
- ・壮瞥町弁景温泉地区
- ・壮瞥町蟠溪温泉地区 など

○観光客ニーズに対応した観光基盤等の整備を行う。

- ・新たな温泉の調査・開発
- ・温泉熱を利用した施設の整備
- ・湖面の有効活用の検討 など

○広域的な観光ルートを形成する。

- ・宣伝誘致活動や広域連携の取り組み

実施計画

表 6 虻田町

	事業名	事業主体	事業の概要	実施年度
1	月浦地区温泉源開発事業	虻田町	月浦地区の温泉開発	H13
2	月浦地区周辺整備事業	虻田町	基本構想、樹林地ゾーン、コンペンション広場、野 外運動公園、フィットネス健康ゾーン、体験学習館	H14～
3	有珠山火山活動災害復興 支援土地条件等調査 (温泉資源変動調査)	北海道	火山活動に伴う温泉資源の変動状況を明らかにし、 今後の資源動向の予測と資源の安定確保及び適正 管理を提言する	H13～14



表 7 壮瞥町

	事業名	事業主体	事業の概要	実施年度
4	仲洞爺地区自然探勝観光地整備	壮瞥町	整備計画の策定 泉源の開発ボーリングL=1,200m	第1期
5	地域交流拠点施設整備事業 (弁景地区)	壮瞥町	拠点設置、駐車場の整備など	第1期
6	蟠溪地区憩いと癒しの里整備	壮瞥町	親水空間の整備、散策路の整備、観光拠点設置	第2期
7	有珠山火山活動災害復興支援 土地条件等調査 (温泉資源変動調査)	北海道	火山活動に伴う温泉資源の変動状況を明らかにし、今後の資源動向の予測と資源の安定確保及び適正管理を提言する	第1期

(壮瞥町 第1期：H13～15、第2期：H16～18、第3期：H19～22)

当初の復興の取り組みは、いくつかのイベントを組み合わせ、これを噴火報道と組み合わせることで実施することによって洞爺湖温泉の復活をアピールし、観光客の誘致に結び付けようとするものであった。主なイベントとしては、7月29日～8月4日の道庁赤レンガにおける物産販売と観光PR、9月18日広域観光座談会、9月30日昭和神山で「感動市場」開催、12月31日21世紀カウントダウン、3月31日一周年記念シンポジウム、4月28日～5月4日「MOVE 洞爺湖 2001」などがあげられる(奥田 2003)。

こうしたイベントと平行して、復興した洞爺湖温泉をアピールするための誘致キャンペーンも行っていった。これは、毎年ロングラン花火大会への補助金として虻田町から毎年助成されていた3,000万円を、2000年は誘致キャンペーンに振り返ることで議会の了承を得て実施したものである。これを利用して全国紙、地方紙への新聞広告とテレビコマーシャルを流すとともに、観光客誘致キャンペーンを派遣した。これは2001年から2003年まで計画されており、道内はもとより、東北、関東、中国、九州などに派遣され、近年の国外客の増加に対応するために2001年には台湾に、2002年には香港にも派遣している。ここでは町費によって宣伝用のCD-ROMを作成した(奥田 2003)。

### 第三節 エコミュージアム構想

この節で記述する内容で特に記述がない場合は「北海道 2002」を参考としたものである。

#### 第一項 エコミュージアムとは

エコミュージアムとは、自然遺産や文化遺産などを現地で保存、育成、展示する屋内・野外型の総合的博物館とし、過疎化、産業の停滞に悩む農村漁村の地域振興として、1960年代にフランスにおいて提唱された考え方である。

エコミュージアムは、地域全体を「博物館」と見立て、その中の自然、農場・山林・漁場や集落、遺跡などを展示とみなし、住民参加型で作り上げる新しいタイプの野外博物館であり、地域の研究所的な機能、各種遺産の保存機関的な機能、地域の学習・学校的な機能を持たせることにより、地域資源の発掘・活用、地域の魅力づくりへの展開、事業推進の体制づくりといった意義・効果がある。

#### 第二項 有珠山周辺におけるエコミュージアム

有珠山周辺は、2000年噴火で創出した西山山麓火口群や金比羅山火口群、泥石流等により被害を受けた建築物、地熱帯、グラーベン構造等のほか、昭和新山、地殻変動により被災した建物など、過去の火山活動の爪痕についても多く残されている。このような噴火の遺構は、火山活動の脅威や有珠山を学び知る上で重要な財産である。

これらの噴火遺構を保存し、ネットワーク化を図り、有珠山周辺を生きた火山の野外博物館とするエコミュージアム構想を推進することが望まれる。エコミュージアム構想を推進することにより、地域の防災意識を高め、防災力が向上するとともに、新たな観光地としても活用ができることから、その意義と効果は非常に大きいと考えられる。

#### 第三項 エコミュージアムの推進体制

平成12年に伊達市、虻田町、壮瞥町、洞爺村、大滝村、胆振支庁、室蘭土木現業所、室蘭開発建設部、はまなす財団で構成される「有珠山周辺地域エコミュージアム検討会」（事務局：北海道開発局室蘭開発建設部）が設置され、エコミュージアムの可能性、今後の地域振興のあり方の検討がされた。平成13年には、「レイクトピア21」推進協議会（伊達市、豊浦町、虻田町、壮瞥町、洞爺村、大滝村で構成）にエコミュージアム構想策定部会（事務局：壮瞥町）が設置され、地域資源の洗い出し、有識者や住民との意見交換を図りなが

ら、具体的な構想や計画についての検討が行われた。

このエコミュージアムの活動の中でもとりわけ目玉的なものとして、西山火口散策路のオープンがあげられる。これは火口を間近に見ることのできる歩道を整備することで、火山災害への認識と自然観察の機会を広く提供するとともに、新たな観光資源としても利用しようという発想で企画されたものであった。町職員が視察したところによると雲仙国立公園においては環境省の予算で整備された散策路が設置されているが、洞爺湖温泉では当面独自の財源は見当たらず、大きな投資をすることは困難な状況にあった。このため、資材は JR の枕木廃材を格安で譲り受け、労力はボランティアに頼って建設された。2000 年 9 月に工事を開始し、観光協会、建設業協会、町役場職員らが休日を利用して建設に従事し、2001 年 7 月にオープンした。

#### 第四項 洞爺湖周辺地域のエコミュージアム構想

<メインテーマ>

「火の山」「北の大地の歴史」にあふれる自然博物館 ～日本再発見～  
- 火山の恵みを学び、自然があふれる大地にふれ、先人のあしあとを辿って -

<テーマコンセプトとストーリー>

「火の山」と「北の大地の歴史」を学ぶ  
- 火山の恵みや遺構に触れ、火の山が生んだ北の大地の歴史を自ら歩み、学ぶエリア -

「感じる自然」と「もの造り」にふれあう  
- あふれる自然を感じて、里の恵みを味わい、もの造りを楽しむエリア -

先人の「あしあと」を辿る  
- いにしえの知恵を学び、噴火湾の恵みを味わい、歴史のぬくもりを辿るエリア -

<洞爺湖周辺地位エコミュージアム「自然博物館」の構成>

表 8 火山の恵み（遺構）エリア

名称及び呼称	構成
テリトリー	有珠山周辺・昭和新山・有珠湾周辺
コアセンター	○虻田町：火山科学館 ○壮瞥町：火山防災研究センター（計画）
テーマセンター	○壮瞥町：三松正夫記念館 ○虻田町：洞爺湖温泉 総合公園（計画）
サテライト候補	<p><b>【火山遺構】</b></p> <p>泉地、旧国道地溝帯、旧食品工場、やすらぎの家、町営住宅、木の実橋、洞爺協会病院前の断層、昭和新山、新山沼、旧国鉄胆振泉鉄橋跡、四十三山、旧病院等地殻変動跡</p> <p><b>【火山の恵みにふれる】</b></p> <p>有珠山、洞爺湖（温泉）</p> <p><b>【自然の力を畏れる】</b></p> <p>西山山麓火口群、西山火口散策路、金比羅火口群</p> <p><b>【火山遺構】</b></p> <p>火山科学館、旧北大火山観測所、三松正夫記念館、横綱北の湖記念館、壮瞥町道昭和新山第2線の地層露頭</p>

<コア・テーマセンター、サテライト等を結ぶネットワーク>

表 9 サイクリングロード・トレイル・湖面ルート

エリア	名称（区間）	位置づけと整備課題
火山の恵み（遺構） …有珠山周辺、昭和 新山、薄湾周辺	西山山麓火口散策路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・枕木の廃材を用いた素朴な散策路</li> <li>・散策路周辺の噴火の後を示すクレーターなどが傷んできており、散策路以外の立入を禁止する措置が必要。</li> </ul>
	金比羅火口散策路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金比羅山麓の噴火遺構（町営住宅、木の実橋、安らぎの家）と金比羅山火口を結ぶ散策路</li> <li>・砂防ダム整備に合わせて、管理用道路を兼ねたトレイルとしての整備</li> <li>・危険区域であり立入管理が必要</li> </ul>
	四十三山散策路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当地域の噴火の歴史を学ぶ基幹ルート</li> <li>・治山用道路、自然公園散策路の跡を活用し整備</li> <li>・四十三山山頂付近は展望休憩広場の整備が必要</li> </ul>
	有珠山散策路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有珠山山頂部へは①北屏風山ルート②四十三山ルート③有珠山ロープウェイルート④伊達市からのルートがある。有珠山山頂部の眺望はすばらしくこれらルートの整備が多様なガイドツアーメニューを可能にする。</li> <li>・治山用林道を活用して整備／再整備</li> <li>・危険区域であり立入管理が必要</li> </ul>
	湖面ルート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洞爺湖温泉～月浦間、洞爺湖温泉～壮瞥町温泉、洞爺湖温泉～中島間（概設）がある。</li> <li>・各港には掛橋の他、休憩待合いスペースやトイレ、案内マップ等を整備</li> </ul>

#### 第四節 魅力ある観光地づくり整備事業

復興へ向けての明るい兆しが見えてきた噴火から4年目、洞爺湖温泉観光協会会長が安全へのPRの次に何が必要かを考えるようになり、洞爺湖温泉そのものの魅力を高めてなければいけないと考えた。

そこで、当時異動してきた虻田町観光振興課長が自分の足で温泉街を歩き、温泉街の不安の声を聞きながら、独自の将来図を絵（合成写真）で描き作成した。これがきっかけとなり、国土交通省のまちづくり交付金で全体事業費が7億1800万円をかけた事業が「魅力ある観光地づくり整備事業（平成16～18年）」である。この事業に盛り込まれた事業は以下の表のとおりである。

尚、この節で記述する内容で特に記述がない場合は「月刊観光編集部 2005」を参考としたものである。

表 10 魅力ある観光地づくり整備事業

区分	事業名	事業主体	年度	事業内容	
基幹事業	地域生活基盤	①足湯ポケットパーク整備事業	虻田町	H16	<ul style="list-style-type: none"> <li>中央通りに予定しているポケットパークで足湯を整備</li> <li>洞爺湖温泉街全体から湯煙があがり温泉情緒を出せる街並みの整備</li> </ul>
		②花畑広場・散策広場整備事業	虻田町	H16～18	<ul style="list-style-type: none"> <li>遊砂地を利用して、四季を通じた花畑の整備</li> <li>観光地のイメージアップ</li> <li>砂防地内の遺構を周遊できる散策路を併せて整備</li> <li>「ゆったり」・「のんびり」街の中を散策できる楽しさを創出</li> </ul>
		③旧洞爺協会病院跡地噴水広場整備事業	虻田町	H17～18	<ul style="list-style-type: none"> <li>湖水を利用した噴水を設置</li> <li>子ども連れの家族などが親しめるような広場</li> <li>夜は光ファイバーで演出することで足湯とイルミネーションを組み合わせた連続性のある賑わいを創出</li> </ul>
	高空間形成施設	④屋台団地広場整備事業	虻田町	H16～17	<ul style="list-style-type: none"> <li>飲食街地域とホテルを結ぶ屋台団地を整備</li> </ul>
		⑤彫刻・手湯・植栽ライトアップ事業	虻田町	H17	<ul style="list-style-type: none"> <li>洞爺湖畔一周58基の「ぐるっと彫刻公園」のうち、温泉街に設置されている彫刻の他手湯および植栽のライトアップ</li> <li>幻想的空間を創出することにより洞爺湖を訪れた観光客の満足度を充実</li> </ul>

		⑥街並み景観植栽事業	虻田町	H16～17	・植栽により、建物が見え隠れするように沿道やホテルの敷地内にも、植栽事業を実施
小計				647,000 千円	
地域提案事業		①イルミネーションストリート事業	虻田町	H16	・洞爺湖温泉の中心街をイルミネーションで飾る。 ・この通りをメイン会場に2月初旬に洞爺湖温泉冬まつりのイベントを開催 ・したがって12月末より試験的に借用イルミネーション1基点灯し、2月の冬まつりには本格的に設置
		②手湯整備事業	虻田町	H16	・各ホテル・旅館の玄関前に手湯を設置 ・足湯と併せ、洞爺湖温泉街全体から湯けむりがあがり温泉情緒を出させる街並みの整備
		③屋台団地広場整備事業	虻田町	H18	・飲食街地域とホテルを結ぶ屋台団地広場に屋台を設置
		④アンテナショップ整備事業	虻田町	H16	・農業団体が中心となり洞爺湖温泉街で空き店舗を活用したアンテナショップを開設 ・宿泊客の食材として、また土産品としても安全で安価な農水産物と商工会関係団体である虻田町・洞爺湖特産品協議会の商品を陳列
		⑤駐車場の時限開放事業	虻田町	H17	・湖畔に近いホテル・旅館が所有する駐車場を時限的に（予定：10：00～14：00）に宿泊者だけでなく一般観光客に開放 ・館内のトイレも自由に利用してもらうことで地域活性化
小計				71,000 千円	

## 第五章 復興対策の結果

### 第一節 復興事業とその進行状況

第四章で、観光に関する復興対策事業計画を紹介したが、この章ではその事業の進行状況、その中でも特に「エコミュージアム構想」と「魅力ある観光地づくり整備事業」について述べていく。

#### 第一項 エコミュージアム構想の進行状況

現在では、火山科学館や西山火口散策路、金比羅火口散策路など建築物やテーマセンターの整備はほとんど終わっている。

火山科学館は、2007年5月に洞爺湖ビジターセンターの中にオープンした。この施設は、1977年や2000年の噴火の様子を再現したものや、その時実際に被害を受けた車や噴石等も展示してある。そして、子どもでも当時の様子がわかりやすいようにミラービジョンで避難所の生活を再現し、有珠山のQ&Aをグループで回答できるようにしてある。このように有珠山の噴火の歴史や災害時の様子を楽しんで学ぶことができるようになっている。実際にオープンから小さい子どものいる家族連れなどでにぎわっている。筆者も実際に行ってみたが、噴火というものを肌で感じることができ、当時の様子を詳しく知ることができた。

西山火口散策路は、前述したように2001年7月にオープンした。それからオープン以来の半年間だけで40万人がこれを訪れ、2002年には4月20日から11月10日までの開業期間に56万8000人に達し、観光復興に大きく貢献している。この施設の一番の魅力は、火口から10メートルほど近くの距離まで行くことができ、噴火の被害を当時のまま置いてあることである。これにより、噴火というものを間近に感じるができるのである。これも実際に歩いてみたが、火口のすぐ近くや被害にあった建物や道路の脇に散策路があるので、目で見て歩くことによって当時の被害の大きさを知ることができると感じた（奥田2003）。

金比羅火口散策路は、洞爺湖温泉街近くにあり、アスファルト舗装の散策路が完成した。噴火被害を受けたやすらぎの家、公営住宅、土石流で流された橋など、遺構の数々を間近に体験することができ、これも人気のある施設である。

このように一見エコミュージアム構想については完了しているかのように思えるが、実



際には町全体の自然全体がミュージアムにするという計画なので終わりはないという。しかし、現在はエコミュージアムに対して地域全体があまり活発に動いているわけではないということも事実である。



図1 ビジターセンター



図2 西山火口散策路（歩道）



図3 西山火口散策路（被害にあった道路）

## 第二項 魅力ある観光地づくり整備事業の進行状況

「魅力ある観光地づくり整備事業」については、初年度で、アンテナショップ「洞爺丸鮮市場」（平成16年10月オープン）、そして、イルミネーションストリート（平成16年12月）も完成した。

アンテナショップは、温泉街の空き店舗を活用したもので、農水産物など町の特産品を販売している。

足湯ポケットパークに設けられた足湯と手湯は「薬師の湯」と名づけられている。その由来は、ポケットパークの一面に町民グループによって建立された「湯前薬師如来堂」。その中にある「湯前薬師如来像」のおみくじが人気を呼んでいる。このおみくじには何も書かれていないが、手湯に入れると占いの結果が浮かび上がってくる仕組みになっている。○吉の他に大当たりがあつて、この大当たりが出れば、温泉街の11の宿泊施設での日帰り入浴券が当たるという工夫がしてある。

冬場の魅力づくりとして実施されたのがイルミネーションストリート事業。平成16年のクリスマス前後に試験点灯をし、点灯式の告知をしたところ、それ以外に特別のPR活動をしたわけでもないのにも関わらず、イルミネーションを眺めるカップルが目立った。洞爺湖をイメージしたLED（発光ダイオード）の青色のイルミネーションのほのかな灯りが、静かな雪景色に合うものであった。そして、噴火の翌年から始められた2月の冬まつりをこのイルミネーションで実施、新たな魅力をつくり出した（月刊観光編集部2005）。

街並み植栽事業では、湖側に高層の宿泊施設が並ぶ温泉街の道道洞爺湖登別線に、サク

ラ、もみじの植栽を施した。この通りは、土産物産店、飲食店も並ぶ温泉街のメインストリートだが、高層ホテルが視野を通り、洞爺湖や洞爺湖越しに見えるはずの森や山を望むことができない。殺風景にも感じられるこの光景に、木々が彩りとなってきている。また、このメインストリートの西端は札幌方面からの洞爺湖温泉玄関口である。ところが、ここに広がる病院の跡地は、旧洞爺協会病院跡地噴水広場整備事業で、この1万5000㎡を、駐車場や公園として整備し湖畔へと観光客を誘導するようにした（月刊観光編集部 2005）。

また、この事業の目玉となるのは手湯で、各宿泊施設の玄関前に設置された湯けむりが温泉らしさを演出している。また、各手湯にテーマ（長寿の湯、健康の湯、縁結びの湯、商売繁盛の湯等）を設け、足湯ポケットパークの手湯「薬師の湯」をスタート（あるいはゴール）に手湯巡りを楽しめるようにしている。この計画を始めた当時は、無料でスタンブラリーを3ヶ月間行った。そして現在では、手湯カードというものを一枚200円で販売し、所定の手湯4ヶ所を全てまわると応募できる仕組みになっている。この応募によって、月に1人懸賞品が当たるというものである。懸賞品の内容は月によって変わるが、入浴剤等が当たる「お家コース」と洞爺湖を周る遊覧船のチケット等が当たる「現地コース」の二つがある。

こうしたアンテナショップや足湯ポケットパーク、イルミネーションと、「魅力ある観光地づくり整備事業」の復興事業が進んでいく中で、関係者の対応も変わっていった。

沿道の植栽を提案した時、各宿泊施設・店舗からは「誰が落ち葉を掃除するのか」「花が枯れたらどうするのか」といった声があった。しかし、足湯ポケットパークの雪かきや掃除を近所の宿泊施設・店舗が自主的に行うようになった。当時は、手湯は事業費で施設設備の負担するものの、配湯は各宿泊施設の負担になっており、16ヶ所の設備予定に対し、すでに11ヶ所が決定していた。現在では、各宿泊施設の敷地内に手湯や足湯があり、その数は合計で手湯12ヶ所、足湯2ヶ所がある。この施設の配湯は、その敷地を有している各宿泊施設で負担している。駐車場の時限開放事業は平成17年で、解放前は「事故が起きたら大変」というのが宿泊施設側の反応であったが、現在ではいくつもの宿泊施設が実施、観光客への掲示も掲げている。

このように事業を進めていく中で、事業を進める側だけでなく、地域が一体となって協力して進めていくようになった。



図 4 足湯（洞龍の湯）



図 5 手湯（縁結びの手湯）

## 第二節 観光客入り込み数の変化

今回の噴火は比較的短期間に終結したが、それでも3月末から7月にかけて4ヶ月間の営業が停止され、その後前述したようなさまざまな取り組みを行いつつも実際には観光客の回復にはかなりの期間を要している。

まず2000年7月末の再開以後の観光客の回復状況は8月で10%、9月30%、10月には約50%程度まで回復したと見られている。しかし、観光シーズンの大部分を失った2000年度の宿泊客述べ数は1999年の77万6000人から30万7000人と37.9%にまで大幅に落ち込んだ。観光客入り込み数で見ても、1999年の355万1781人に対して2000年は126万8157人と35.7%と落ち込んでいるのがわかる。図6は1977年から2006年までの観光客入り込み数の推移を表したものである（奥田 2003）。

これを見ると、噴火前の1999年に比べて観光客の入り込み数が2001年には約80%、2002年には約90%近くに回復したことがわかる。その後、2003年までは順調に回復を見せてい

るが、その後の 2004 年から 2006 年までは伸び悩んでいる。これは噴火による被害も落ち着き、復興事業も順調に進んでいる時期である。

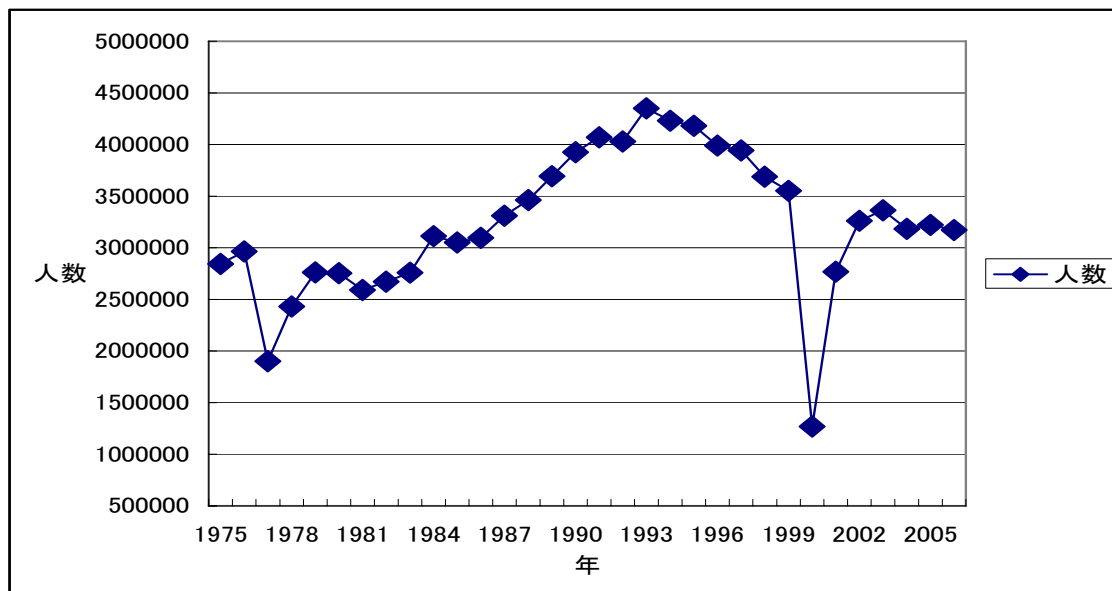


図 6 洞爺湖町の観光客入込み数の推移 (北海道観光客入込数調査報告書より作成)

次に注目したいのが、海外からの観光客の入り込み数である。図 7 は北海道全体の海外からの入り込み数を表したものである。次に図 8 は北海道に訪れた観光客の入り込み数を国別に表したものである。まず図 7 を見てわかるように、観光客数はほぼ毎年のように右肩上がり伸びている。その中でも 2004 年から急激な伸びを示している。これは、海外旅行ブームや海外の国の経済状況が大きく関わっていると考えられる。その中でも特に、アジア圏の国々が大きく影響している。これは、図 8 から見られる。これを見るとこの国々の全ては 2003 年に比べて 2004 年は伸びていることがわかる。これは、アジア、東南アジアの国々の景気が良くなっていることと、北海道がその国々への誘致活動に力を入れていることが大きなきっかけとなっていると考えられる。実際に近年の中国、台湾を始めとするアジアの国々の経済成長は目を見張るものがある。

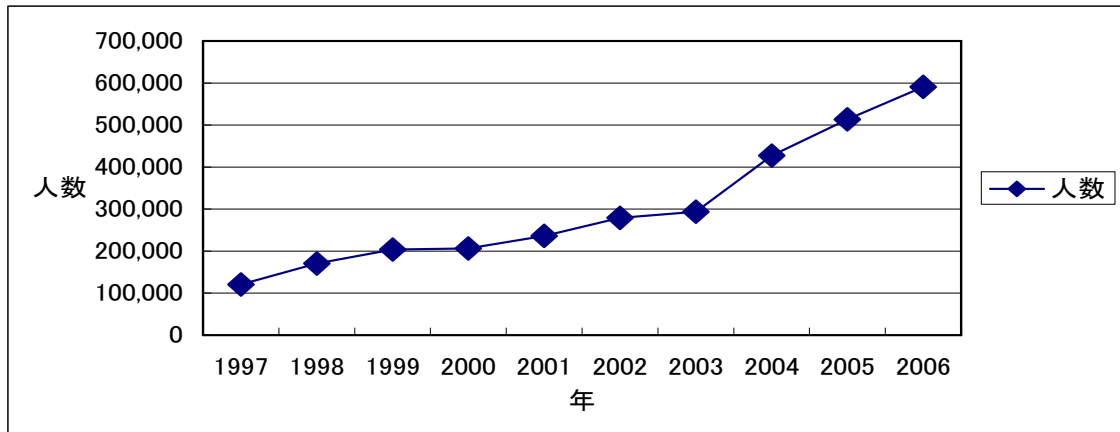


図7 訪日外国人来道者数の推移（北海道観光客入込数調査報告書より作成）

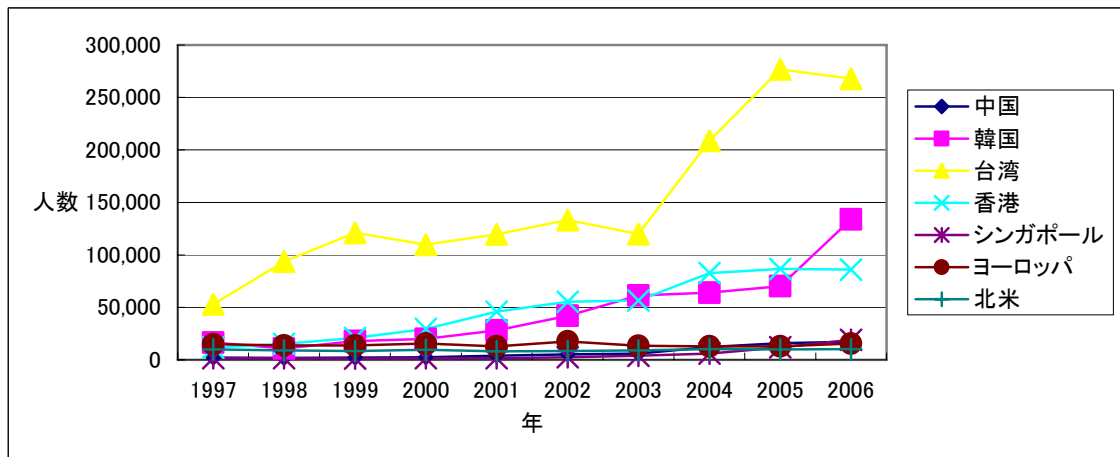


図8 国別訪日外国人来道者数の推移（北海道観光客入込数調査報告書より作成）

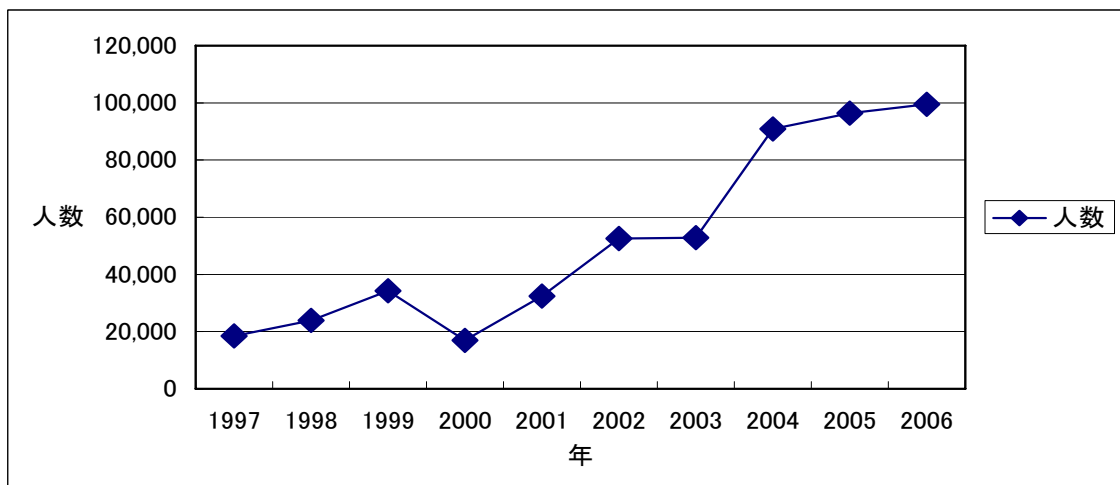


図9 訪日外国人数の推移（洞爺湖町）

そして、最も注目したいのがその中でも洞爺湖温泉街に訪れる海外からの観光客数の推移である。図 9 はこれを表したものである。基本的には図 7 と同じような推移を表している。違う点としては、図 9 は 2000 年噴火時に大きく落ち込んでいることである。それ以降は、2004 年に大きく伸びており、図 7 同様の推移を表している。これを国別に見てみると、特に台湾と香港が大きく伸びていることがわかる。この 2 国は共に 2004 年に前年比プラス 100% も伸びている。これは、噴火後にほぼ毎年行った海外への誘致活動やキャンペーンが実を結んだものと考えられる。最初はこのような活動を洞爺湖町独自で行っていたが、現在では 2008 年にサミットがあることもあり、北海道とともに引き続き行っている。このように海外からの観光客も伸びていることは事実だが、道全体と洞爺湖町の伸び率に差があるように見える。これをわかりやすく表すために常用対数を用いて、北海道全体の訪日観光客数と洞爺湖町の訪日観光客数を表した。それが図 10 である。これを見てわかるように 2004 年以降は、北海道全体の伸び率と比べて洞爺湖町の伸び率が伸び悩んでいることが見られる。

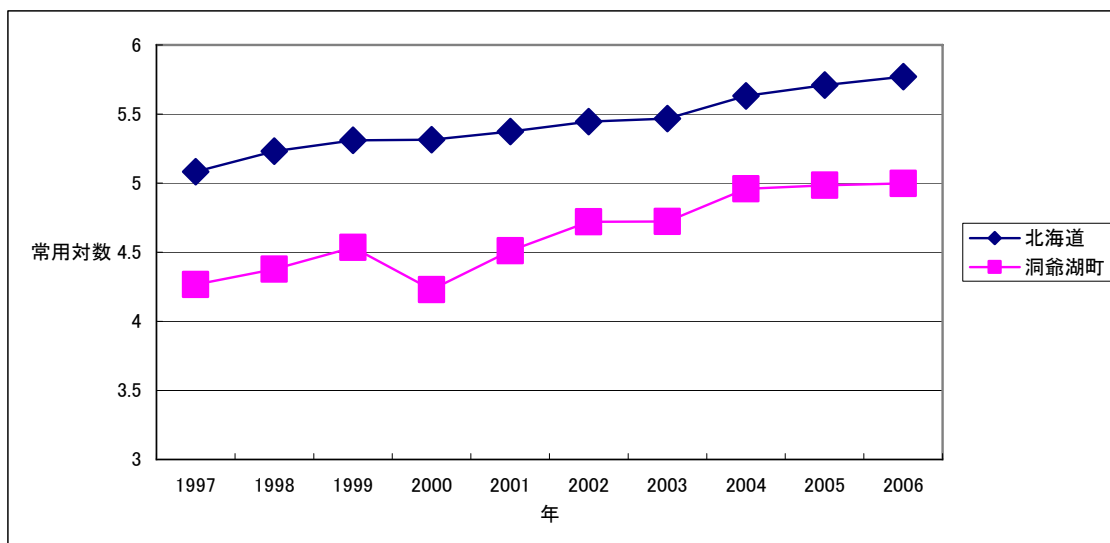


図 10 訪日外国人観光客数の北海道全体と洞爺湖町の比較

### 第三節 これらから見てくること

以上のように、現在では噴火そのものによる観光客の減少は克服しつつある。しかし、洞爺湖温泉観光が構造的に抱えてきた問題が噴火をきっかけにクローズアップされていることが考えられる。これから課題となるのは、今回の噴火を契機として取り組みの機運が盛り上がっていることについて将来の展望とどう結び付けていくかということであろう。

## 第六章 考察・課題

これまで述べてきたことから明らかなように、洞爺湖温泉街は噴火以降、さまざまな復興事業や対策を行ってきた。その結果、観光客も回復し持ち直してきている。しかし、完全にその輝きを取り戻したわけではない。1977年（昭和52年）の噴火時に比べると、噴火後一年での観光客入り込み数の回復は2000年の噴火時のほうが大きい。その後数年の入り込み数を見ても今回のほうが順調に回復しているように見える。こういった意味では、復興計画は順調に進んでいるようにも感じる。しかし、観光客入り込み数は1992年をピークに、それを超えることがいまだに一度もない。2008年には北海道洞爺湖サミットが開催されるにもかかわらず、近年の観光客入り込み数の伸び幅が伸び悩んでいるのが現状である。この章では、これから洞爺湖温泉街がどのようなことをしていかなければいけないのか、これからの課題を考えていく。

まず、より誘致活動に力を入れることが必要となってくると考えられる。これは国内外問わずに言えることであるが、特に海外への誘致活動が重要になってくるであろう。

国内に関しては、日帰り客ではなく宿泊客を増やすことが必要となってくる。現在では、道内からの客は車で来て日帰りで帰ってしまうケースが非常に多くなっている。これは、バブルの崩壊がきっかけとなり、景気が回復した後は近年の海外旅行ブーム等の社会的背景が関係していると言われている。それだけではなく、洞爺湖温泉街自体の魅力不足も大きく関係していると考えられる。宿泊客が増加すれば、必然的に観光客も増加するであろう。

そして、海外への誘致活動に更に力を入れていくことによって、近年伸び幅が小さくなっている海外からの観光客入り込み数も更なる伸びを示すことになるはずである。特に香港・台湾・韓国への誘致活動をより活発にしていくことが重要と考えられる。前述したよ



うに近年はアジア圏からの訪日外国人来道者数がかかなり増加している。そういった中で、香港と台湾に関しては2005年から2006年の伸びがほぼない。この2カ国も近年経済的にも成長しており、日本への注目も集まっているという話題をよく耳にする。アジア圏でも特に伸びの少ない香港と台湾からの観光客を集めることによって洞爺湖温泉に対するアジア全体への注目度も上昇するであろう。そして、2005年から2006年に大きな伸びを示している韓国への誘致活動に力を入れることによっても同様の効果を得られることができると考えられる。

また、海外からの観光客の増加は、国内の観光客の増加にもつながってくると考えられる。これは海外からの観光客が増え、観光地として今よりもっと注目されることにより、海外だけではなく国内からの注目も集まることからそう考えられる。実際に現在でもほぼ毎年海外へのPR活動等を進めたり、日本語以外の看板やパンフレットを置いたりしているが、町全体でといった感じの印象は筆者には受けられなかった。そのようなことに力を入れているのは、大型ホテルや観光施設といった一部に限られると言っても過言ではない。例えば同じ日本の観光地の京都などと比べると、日本語以外の何カ国ものパンフレットや看板が観光施設や大型ホテルだけではなく街中のいたる所にある。洞爺湖町も特に3カ国に対応したパンフレットや看板をもっと設置するべきであると思う。

このように国内だけではなく、海外への誘致活動や迎える体制を整えることを進めていくためには、更なる温泉地全体の魅力を高めること、そして地域全体でそのような盛り上がりを高めていくことも重要になってくるであろうと考えられる。実際に筆者が2007年9月に洞爺湖温泉街に直接行った際に、町全体での盛り上がりなどといったものは、大きく感じられなかったのが正直な感想である。

噴火以後の経過として紹介した、西山火口をめぐる取り組みなどの活動はこのことを意識しつつ、噴火を契機として逆にこの点で展開を模索しつつあると行うことができよう。

こうした取り組みは必然的に洞爺湖温泉街に限定されない、より広い視野での観光開発の必要性を導き出すことにつながる。先に述べた「エコミュージアム構想」や「洞爺湖ぐるっと彫刻公園」、2007年に33回目を迎えた「洞爺湖マラソン大会」が周辺自治体の協力で実施されてきた。これらの取り組みに対して町民の中から、道や市町村当局が中心で、住民の下からの盛り上がりをもっと作り上げる必要があるであろう。その中でも特に「エコミュージアム構想」については、近年は地域でも活発に動いているわけではないという話もあるので、地域全体でもっと活発になっていく必要があると考えられる。

このように噴火からの復興を終えた洞爺湖温泉街にはまだまだ課題がある。こうしたことを克服していくことによって洞爺湖温泉街はますますの発展をしていくことであると考えられる。これからアジア北部における国際的観光地として洞爺湖温泉が発展していくことを展望するならば、来訪者が洞爺湖温泉に街としての魅力をどのように感じるのかという、まちづくりの視点が欠かせないであろう。噴火を契機とした住民の共同の機運がこうした活動につながっていくことができれば、これからの洞爺湖温泉に対して大きな期待が持てると感じている。

40 字×30 行

31 ページ

原稿用紙 93 枚

### 参考文献

- ・堀善郎、2001.8.2、『洞爺湖温泉復活作戦（グラビア）』、週刊新潮、P14～15
- ・月刊観光編集部、2005.6、『有珠山噴火から5年「温泉らしさ」や「癒し」のある魅力づくり洞爺湖温泉（特集災害からの観光復興）』、月刊観光（日本観光協会）、P46～50
- ・虻田町史編集委員会、2002、『2000年有珠山噴火 その記録と教訓』、北海道虻田町
- ・奥田仁、2003.6、『開発論集』、北海学園大学開発研究所

### 参考資料

- ・北海道総務部防災対策室防災消防課・北海道総合企画有珠山火山活動災害復興対策室、2003.3、『2000年有珠山噴火災害・復興記録』
- ・北海道、2001.3、『2000年有珠山噴火災害復興計画基本方針』
- ・北海道、2002.6、『有珠山周辺防災まちづくり』

### 参考 URL

- ・北海道庁、「訪日外国人来道者数（実数）の推移」、2007  
( <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/1ADA5017-7B4F-493B-94AE-B98DFB5E11A3/0/irikomisuii.xls> )、2007.12.5、